

比況の助動詞「ごとし」の用法と機能

——『宇治拾遺物語』において——

白 神 由紀江

一 はじめに

比況の助動詞「ごとし」は、「AはBのごとし」のように用いられる。「AはBのごとし」とは、Aについて叙述するためにBを引き合いに出し、AをBとみなすことによつてAをAというだけでは説明できないところを、Bの一面を利用して述べる用法である。「ごとし」が活用語であるため、「AはBのごとくVする」のように連用修飾句となつて、AがVすることを、Bという事柄・事物との関係で述べる場合もある。

本稿では、『宇治拾遺物語』の用例から「ごとし」の用法を検証し、「ごとし」の機能について考察する。『宇治拾遺物語』を取り上げたのは、鎌倉時代の和文体の説話集における「ごとし」の用法を検証するためである。連体形「ごとく」から派生した「ごとくなり」の用例も含める。用例の（ ）内に、『宇治拾遺物語』における説話番号を示す。

二 「ごとし」の用法と分類基準

「ごとし」の意味は、「等同」「類似」「例示」等に分類されている。しかし、その意味は何に基いて決まるのか、その意味の差は何によつて生れるのが不明確であるため、明らかにしたいと考える。

本稿は「ごとし」の用法を、AとBの関係による意味上の分類と、「ごとし」に関わる文法上の分類とに分けて考察し、その分類基準に基いて「ごとし」の表す意味を分別する。

二・一 意味上の分類

ここでいう意味上の分類とは、AとBがどのような関係にあるかを明示的に示したものである。

- ① 物理的關係か否か
現代語の用例で示すと、

(a) あの人は虎のようだ。

(b) あの人はいつものようだ。

の場合、AとBは、用例(a)では「あの人」と「虎」、用例(b)では「あの人」と「いつも」である。「あの人」と「虎」は実体のある物どうしの関係である。しかし「あの人」と「いつも」は、「いつも」が抽象的な事柄であるため、物どうしの関係ではない。「あの人」の現在の様子と、いつもの様子との関係なのである。

そのように、「物理的関係」とは、AとBが実体をもつ、物と物との関係の場合であり、「物理的関係」でないというのは、物と物以外の関係のことである。AとBが事柄どうしの関係であったり、Aについて叙述するために引き合いに出されたBが、身近な事態を現実的、また限定的にとらえる語であったり、時間的な概念を表す語であったりする場合である。

(1) 盗跣をみれば、頭の髪は上ぎまにして、みだれること蓬のことし。

(2) 百官供奉つねのことし。

(一九七)
(六四)

用例(1)の場合は、盗跣の上向きになってみだれた頭の髪と、蓬との関係を取り上げている。頭の髪と蓬とは具体的な実体をもつ物であるから、「物理的関係」をなしている。

用例(2)の場合、「つね」の意味は「ふだん」「平素」であり、抽象的な語である。そして、AとBとの関係は、現に行われている百官供奉とふだんの百官供奉との関係であり、事柄どうしである。

この関係を「概念的な関係」と名づける。

(3) 此内供は、(略) 提に湯をかへらかして、折敷を鼻さしているばかり通して、(略) 又二三日になれば、さきのごとくに、大きになりぬ。かくのごとくしつ、はれたる日数はおほくありければ、物食ける時は、弟子の法師に、平なる板の一尺ばかりなるが、

(二二五)

用例(3)の場合は、Aは「此内供」を指し、Bに「かく」という副詞が用いられている。

「かく」は事態を現実的、限定的にとらえて指示する働きをする。つまり、前述した事柄を示しているのである。したがってAは人間、即ち物であるが、この場合も「概念的な関係」である。

「物理的な関係」の場合は、AとBが物どうしなので具体的にその関係が把握できる。「概念的な関係」の場合は、AとBの表す内容が抽象的であるため、把握の仕方が概念的になる。

② AとBに共通の上位概念がたてられるか否か

AとBが、「もみじ」と「手」のような異なる物どうしである場合もあれば、「右手」と「左手」のように、「手」という共通の概念をもった物どうしの関係の場合もある。

(4) そのとき僧正、いたゞきより黒煙をいだし、加持し給に、暫有て、まがれる臂、はたと鳴りてのびぬ。即、右の臂のごとくに延たり。

(一四二)

(5) 陰陽師のいはく、「仰らる、事、もとも道理なり。世の過がたければ、さりとては〔とて〕、かくのごとく仕る也。しからずは、なにわざをしてかは、妻子をばやしなひ、我命をも續侍らん。道心なければ上人にもならず、法師のかたち侍れど、俗人のことくなれば、後世のこといかゞと、かなしく侍れど、(一四〇)

用例(4)の場合、「まがれる臂」は明らかに左の臂を指し、その左の臂と右の臂との関係が示されている。つまり、「臂」という共通の上位概念があり、その下位分類として「左の臂」と「右の臂」が存在するのである。

用例(5)は、陰陽師というある一人の人間の持つ、聖と俗の対比である。つまり、陰陽師というある一人の人間を共通の上位概念とする下位分類に、「法師のかたち」と「俗人的な生活」が挙げられている。聖(法師のかたち)と俗(俗人的な生活)は、物理的ではなく概念的な関係をなしている。

(6) そこばくの女御、后を御覽じくらぶるに、みな土くれのことし。

(九一)

用例(6)の場合は、用例(3)のように共通の上位概念に基づく下位分類として「そこばくの女御、后」と「土くれ」の関係が示されているのではない。「そこばくの女御、后」と「土くれ」とは全く異なるものである。しかし「そこばくの女御、后」について叙述するために「土くれ」を引き合いに出し、「土くれ」のある面を用いて述べているのである。

③ AとBが同一物が異物か
現代語の用例で示すと、

(c) 彼女の顔はもとのように白くなった。

(d) 彼女の顔は雪のように白くなった。

の場合、AとBは用例(c)では、「彼女の顔」と「もと」である。「もと」は「以前」という抽象的な事柄を示すが、「もと」の表しているのは以前の顔のことで、彼女の現在の顔と以前の顔との関係である。どちらも「彼女の顔」を示していることに変わりはなく、同一物である。つまり、AとBには「彼女の顔」という共

通概念がたてられるのである。

用例(1d)では、AとBは「彼女の顔」と「雪」で、異物の関係である。

(2) 百官供奉つねのごとし。

(六四) (前掲)

(7) 僧伽多がつまにてありし、(略)これは玉のごとし。(九一)

用例(2)の場合、AとBは現在の「百官供奉」といつもの「百官供奉」であり、同一物の関係である。

用例(8)の場合、AとBは「僧伽多がつま」と「玉」で、物理的な関係における、AとBに共通概念がたてられない場合である。

二・二 文法上の分類

「AはBのごとくVする」のように「ごとし」が「ごとく」、あるいは「ごとくなり」が「ごとくに」と活用して連用修飾の働きをなす場合もあれば、文末が終止形「ごとし」の場合もある。

① 連用修飾の働きをなすか、文末が終止形か

(8) 火を山のごとくたきければ、夢などを見るごちして、わかきびはなるほどにてはあり、物おぼえ給はず。(一一五七)

(9) それに、このかふらきの渡にゆきて、わたらんとするに、

わたりせむとする者、雲霞のごとし。

(三六)

用例(8)の場合、「山のごとく」は「たく」にかかる連用修飾句となる。この場合、「山」は火を形容しているのではなく、「火をたく様子」を表している。つまり、AがVすることとBとの関係なのである。

用例(9)では、「わたりせむとする者」が次々にやってくる様子そのものの様子を「雲霞」を用いて表現している。

この二つの場合を現代語の例で示せば、

(e) 彼は狼のように肉を食った。

(f) 彼は狼のようだ。

の違いとなる。つまり、用例(e)では、「狼のように」は「食った」を修飾し、肉を食べる様子を狼のようだとしているのである。それに対して用例(f)では、彼の、あるの面を狼のようだとしているのではなく、さまざまな面を「狼のようだ」と形容していることになる。

「ごとし」が連用修飾句として用いられる場合は、述語部分の動作を修飾する場合と、状態を修飾する場合とがある。

(10) 火をてんのめのごとくにともして、我あたるうつほ木のみ

へに、あまはりぬ。

(三)

(11) たけ七尺斗の鬼、身の色は紺青の色にて、髪は火のごとくに赤く、くび細く、むね骨は、ことにさしいでて、いらめき、腹あくれて、
(一三四)

連用修飾句となる場合において、前掲の用例(8)では、「山のごとく」は「火をたく」という動作を形容している。

用例(10)も、「てんのめのごとくに」は、他動詞である「とます」にかかる。「てんのめのごとくに」は、「火をともした」動作を形容しているのである。AがVすることとBとの関係である。それに対して、用例(11)においては、「火のごとくに」は「赤く」という、状態を示す形容詞にかかる。AがVであることとBとの関係である。このように連用修飾の場合は、動作を表す述語にかかる場合と状態を表す述語にかかる場合とがある。

現代語でその違いを示す例を挙げる。

(g) 彼は狼のように肉を食った。

(h) 彼は狼のように肉を食える。

「狼のように」は用例(g)では「食った」という動作を表す語にかかり、用例(h)では、「食える」という状態を示す語にかかる。つまり、文法上では、まず「ごとし」を含む句が連用修

飾か、または文末が終止形「ごとし」かで分類し、その連用修飾句においては、動作を表す語にかかるか、状態を表す語にかかるかで分類される。

② 「ごとし」の上接形式が語か文か

「ごとし」は上接の格助詞に「の」と「が」の二つを持つという特徴がある。「の」の場合は体言が上接する。また、「が」の場合は文が上接する。

(12) 病者、かしらをそらで年月を送りたるあひだ、ひげ、かみ、銀の針をたてたるやうにて、鬼のごとし。
(六〇)

(13) 手をすりて、念佛申て見れば、佛の御身より金色の光を放て、さしいりたり。秋の月の、雲間よりあらはれ出たるがごとし。
(一六九)

用例(12)の場合、「の」の上接語は「鬼」という体言である。したがって、病者と鬼という語の関係となる。

用例(13)の場合は、「が」の上接語が「あらはれ出たる」という動詞の連体形であり、「佛の御身より金色の光を放て、さしいりたる」とことと、「秋の月の、雲間よりあらはれ出た」という文と文との関係である。

この二つの場合を現代語の用例で示す。

(f) 彼は狼のようだ。

(前掲)

(i) 彼が好物の魚を食べるのは、狼が肉を食べるようなものだ。

つまり、用例 (f) の場合は、「彼」と「狼」という語の関係であるのに対して、用例 (i) の場合は、「彼が好物の魚を食べる」という文と「狼が肉を食べる」という文との関係が示されているといえる。

三 「ごとし」の用法と機能

これまで検証してきた分類基準をもとに、『宇治拾遺物語』にみられる「ごとし」の表す意味を分別していく。

① 等同的用法

「等同」とは、ある事物・事柄が、他方の事物・事柄と同じであるという意味である。「ごとし」がこの意味を表すのは、AとBが概念的な関係で、AとBが同一物の関係の場合である。

(2) 百官供奉つねの「ごとし」。

(六四) (前掲)

(14) ゆづれば鼻ちひさくしはみあがりて、たゞの人の鼻のやうになりぬ。又三日になれば、さきの「ごとく」に、大きになりぬ。

(二五)

(15) しばしうらなひて、「ごとくにて候」と申所を、掘らせてみ給に、土五尺ばかり堀たりければ、案の「ごとく物ありけり。

(一八四)

(16) ある日例のごとく御供しけるが、門を入らむとし給へば、この犬、御さきにふたがるやうにまはりて、

(一八四)

(17) 弟子をとらへて寺へおはして、鐘をつき、衆會をなして、大衆にこのよし語り給。(略) かくのごとく、罪を懺悔してければ、阿那含果をえつ。

(一七四)

用例 (14) の場合は、二、三日たった後の鼻と、以前の鼻との大きさが同じという関係であり、用例 (15) では、物があると思っていたことと、思っていたとおりに事実あったこととの関係である。用例 (16) はある日の御供の様子といつもの御供の様子、用例 (17) では、前述の事柄の内容が罪の懺悔と同じであるという関係である。

「ごとし」が「等同」の意味を表す用例は31例ある。

② 類似的用法

「類似」とは、ある事物・事柄とある事物・事柄が似ていることを表す。「ごとし」がこの意味になるのは、AとBに共通の概念がたてられる場合である。

用例 (4) の場合は、左の臂と、同じ臂でも「右の臂」との関

係であり、その二つが同じようになったという関係である。用例(5)では、かたが法師でも、生活が俗人と同じようになったという関係である。前述したように、用例(4)の場合は、「物理的な関係」であり、用例(5)の場合は「概念的な関係」である。

「ことし」が「類似」の意味を表す用例は4例ある。

「等同」と「類似」は、ともにAとBに共通の概念がたてられる場合であるが、「等同」は、AとBが同一物の場合に成り立ち、「類似」は、AとBが、ある共通の上位概念のもとでの下位分類として存在する場合に成り立つといえる。

③ 比喩的用法

「比喩」とは、ある物事を説明するのに、他の物事を借りて表現することである。「ことし」がこの意味を表すのは、AとBに共通の概念がたてられない、異物の関係の場合である。

(17) 病者、かしらをそらで年月を送りたるあひだ、ひげ、かみ、銀の針をたてたるやうにて、鬼のことし。(六〇) (前掲)

(18) しばしあれば、宮、紅の御衣二斗に押しつゝ、まれて、鞆のことしく塵中よりころび出させ給うて四五度ばかり、打たてまつりて、(一九三)

(19) やことなき人の、軍千人ばかり具しておはしつる。今は信

濃國には入給ぬらん。いみじき龍のやうなる馬に乗て、飛がことしくしておはしき。(一一八)

用例(17)では、「病者」と「鬼」との関係、用例(18)では「宮」がころび出る様子と「鞆」との関係、用例(19)では、「いみじき龍のやうなる馬に乗て」いる様子と「飛」様子の関係である。

いずれもが、異物の関係である。Aについて叙述するのに、Aとは異物のBを引き合いに出して、そのBのもつ一面から述べることにより、Aのもつ面を効果的に引き出して表現するのが比喩である。

「ことし」が「比喩」の意味を表す用例は17例ある。

④ 例示的用法

「例示」とは、例を挙げて示すことである。AとBに共通の上位概念がたてられ、Bが特定の世界を代表するような場合などである。

(20) 残りの輩、我と矢を走たちて、とりくして、たちかはりく射る程に、米のときのなからばかりに、第二のくろみを射めぐらして、射おとして持て参れりけれ。「これすでに、差由がことし」と、時の人ほめの、しりけるとかや。(九八)

この用例の場合、「弓の名人」を共通の上位概念とし、「残りの輩」と「養由」が下位分類として挙げられているが、「弓の名人」として「養由」が春秋戦国時代の有名な人物であることから、「弓の名人」の代表例として挙げられているとみなし、「例示」の意味を表すとする。

「ことし」が「例示」の意味を表す用例は1例ある。

全用例数は52例である。それぞれの分類における用例数は次のようになる。

意味上の分類における用例数

① 物理的関係

AとBに共通の上位概念がたてられる場合

3例

AとBに共通の上位概念がたてられない場合

14例

② 概念的関係

AとBに共通の上位概念がたてられる場合

32例

AとBに共通の上位概念がたてられない場合

3例

これによると、次の点が明らかになったと言える。

1 物理的関係より、概念的関係の場合が多い。

2 AとBに共通の上位概念がたてられるのは、概念的な関係の場合に多い。その場合、32例中31例が同一物の関係である。

また、物理的な関係において、共通の上位概念がたてられない場合が多いが、これは異物の関係である。

文法上の分類における用例数

① 連用修飾句の場合

動作を修飾する場合

33例

状態を修飾する場合

6例

② 文末が終止形の場合

11例

ただし、連体修飾句が2例ある。

① 上接形式が語の場合

48例

② 上接形式が文の場合

4例

これによると、次の点が明らかになったといえる。

1 連用修飾句が多い。

2 連用修飾句の中でも、動作を表す語を修飾する場合が圧倒的に多い。

3 「ことし」の上接形式において、語の場合が圧倒的に多い。

四 まとめ

本稿においては、「AはBのごとし」という場合の、AとBと

の意味上の関係や、そのAとBの事柄・事物と「ことし」の活用形との連結を含めた文法上の観点から、『宇治拾遺物語』における「ことし」の用法を考察し、「ことし」の機能について検証した。

島田勇雄（1955）は、「ことし」の意味分類として「類似」「等同」「例示」「状態」などを挙げている。そして、これらの意味とは、「その語の表わしうる概念内容を大きく分類するときの、個々のわくとしての意味をさす」としているが、「ことし」がそれぞれの場合なぜその意味になるのか、それらの違いはどういった点かがあいまいで不明確であった。本稿は、「ことし」で結びつくAとBの意味関係や、あるいは「ことし」の活用形との結びつきを検証することによって、「ことし」の用法を検証していった。その結果、「等同」「類似」「比喩」といった意味は、AとBとの関係によってもたらされるものであることがわかった。AとBが同一物の場合は「等同」、AとBに共通の上位概念があり、下位分類として同列に挙げられている場合は「類似」、異なるものの場合は「比喩」、Bに特定の世界を代表するものを例として挙げられる場合は「例示」となる。そして、「ことし」そのものは、AとBとを同定する働きをなしているのである。

また、「ことし」の機能と関連するものとして、これまで唱えられている「ことし」の語源説をみると、橋本進吉（1941）において、「こと」を口語の「同じ」「同じこと」、文語の「同じく」の意味とする説が妥当とされ、また、「こと」と「ことし」の語

幹「こと」との同語源説が唱えられている。そして、「ことさげば沖ゆ放けなむ湊より辺落かふ時に放くべきものか（万葉一四〇二）」の「こと」が「ことさらに」と解されていたのに対して、「同じ」と解する説をたてているのである。

「ことし」の語源を考えると、「ことし」は語幹である「こと」と「し」に分けられるゆえ、「こと」と「こと」の語源を同じとみて、「AはBのこと」とならないだろうか。

AとBに共通の上位概念が設定される用例、AとBが同一物である用例が多いことも根拠として挙げられる。

今回は、鎌倉時代の和文体の説話集『宇治拾遺物語』をテキストとしたが、今後は文体差やジャンルの差、また時代差等を考慮にいれて「ことし」の用法を検証していきたいと思う。また、「ことし」のみならず、「様なり」「似たり」等の直喩表現の指標の用法にも言及していきたい。

参考文献

- 五十嵐三郎（一九六四）『比況の助動詞「ことし」——古典語』、『国文学解釈と教材の研究』九一一三
稲垣瑞穂（一九六七）『比況の助動詞「ことし」——平安時代の漢文訓読と今昔物語集の用法』、『静岡女子短期大学紀要』第1号
大坪伴治（一九六四）『訓点語における「如し」の用法』、『訓点語と訓点資料』第28輯

春日和男(一九六〇)『カクノゴトシといふ熟語の訓読性』『語文研究』

一〇

春日和男(一九六八)『比況(ことし・ようだ)』『国文学解釈と鑑賞』

三三—

櫻井茂治(一九六二)『古代日本語の「ことし」について』『国学院雑誌』

六三—六

佐々木峻(一九八二)『院政・鎌倉時代に於ける「類同・例示」等の表現「如し」と「やうなり」について』『鎌倉時代語研究』第4輯

島田勇雄(一九五五)『「ことし」の意味について』『神戸大学文学会研究』?

研究?

築島裕(一九五七)『「ことし」』『国文学解釈と鑑賞』二二—

富田正一(一九五八)『平安時代の「ことし」』『解釈』4

橋本進吉(一九四〇)『「ことさげば」の「こと」と如の「こと」』『国語と国文学』一七一—〇

語と国文学

橋本進吉(一九四二)『「ことさげば」の「こと」の語義について(上)』『国語と国文学』一八一—

「国語と国文学」

橋本進吉(一九四二)『「ことさげば」の「こと」の語義について(下)』『国語と国文学』一八一—二

「国語と国文学」

堀田要治(一九四二)『如しと「様ナリ」とから見た今昔物語集の文章』『国語と国文学』一八一—〇

文章』『国語と国文学』

森田良行(一九五九)『いわゆる比況の助動詞「ことし」の研究』『国文学解釈と教材の研究』四—二二

文学解釈と教材の研究

山田孝雄(一九三五)『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』宝文館

文館

山田孝雄(一九三六)『日本文学概論』宝文館

山梨正明(一九八八)『比喩と理解』東京大学出版会

吉田金彦(一九七七)『国語意味史序説』明治書院

(しらかみ ゆきえ) 岡山大学大学院文学研究科

研究室受贈圖書雑誌目録Ⅱ

大妻女子大学紀要—文系—(大妻女子大学) 三四

岡山大学国語研究(岡山大学教育学部国語研究会) 十六

香川大学国文研究(香川大学国文学会) 二六

學習院大學國語國文學會誌(學習院大學國語國文學會) 四五

学大國文(大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座) 四五

座) 四五

香椎潟(福岡女子大学国文学会) 四七

活水論文集 日本文学科編(活水女子大学・短期大学) 四五

金沢大学語学・文学研究(金沢大学教育学部国語国文学会) 二九

金沢大学国語国文(金沢大学国語国文学会) 二七

河南論集(大阪芸術大学芸術学部文学部国語国文学会) 七

上方文化研究センター研究年報(大阪女子大学上方文化研究センター) 三

タ—) 三

上林曉研究(園田学園女子大学 吉村研究室) 十

季刊ぐんしょ(統群書類従完成会) 五五、五六、五七、五八

岐阜女子大学 紀要(岐阜女子大学) 三—

岐阜大学国語国文学(岐阜大学教育学部国語教育講座) 二九